

人文フォーラム

27

2007.8



CONTENTS

巻頭言

新任のあいさつ

人文学部長 追塩 千尋…… 1

Essay

〔新任教員紹介〕

「着任の挨拶にかえて」

英米文化学科教授 池内 静司…… 2

「越境と逸脱をめざして」

英米文化学科教授 本城 誠二…… 4

「地球歩きのおすすめ」

日本文化学科教授 寺田 吉孝…… 6

第4回 日本文化演習

日本文化演習体験記…… 8

ゼミ室紹介

2部 日本文化学科

大濱ゼミナール……13

大学院の窓

「負け犬を越えて」

文学研究科 英米文化専攻

修士課程 1年 前田 陽子……14

研究、その足跡

……15

人文学部第11期生

卒業論文・卒業研究題目一覧 ……17

編集後記

……21

北海学園大学人文学部

巻頭言

新任のあいさつ

人文学部長 追塩 千尋



桑原学部長の後を受け、本年4月から学部長を務めることになりました。人文学部の充実・発展を目指して、微力を傾ける所存であります。どうぞよろしくお願い致します。併せて、桑原前学部長のこれまでのご苦勞をねぎらいたと思います。

新学部長として、特に抱負という気負ったものではありませんが、教育のソフト面での充実化、ということに少し触れおきたいと思います。

人文学部は開設から今年で14年となります。学園の中では比較的若い学部ではありますが、この短い間にも国内外で広く活躍し得る人材を育てる、という目標達成のためにカリキュラムの充実化の試みを何度か行ってきました。最近では、2005年度に大きな改訂を行いました。

2005年度の改訂におきましては、卒論を重視しそれに向けて早い時期からの動機付けを目指す、ということを目眼にしました。そのため、1年次から演習を義務づけ、高校までとは異なる大学という場における勉学のし方を身につけさせ、学年進行に伴い演習あるいは演習的要素の強い授業の履修を積み重ね、卒論につなげていく、という流れを作りました。

本年度は新カリキュラムで育ってきた学生は3年生になり、専門的な演習に取り組み始めています。教育の効果はすぐ現れるものではありませんが、新カリキュラム実施の折り返し点に当たる本年度は、その真価が問われる時期にさしかかっている、といってよいと思います。カリキュラムは常に点検・改善の努力を求められるものですが、現カリキュラムの上記の意図を改めて認識されたうえで、その長短両面に関して教職員・学生諸君からの忌憚の無いご意見をお願い致します。

その際に、人文学は「人間とは何か」という問いへの答えを探るための人間基礎学ともいうべき性質のものであること。したがって、法律・経済などとは異なり結果がすぐ出る訳ではなく、語学などの一部を除いては即戦力・即効性は期待出来ないということ。しかし、後から漢方薬のように効いてくる持続的な力（問題解決・対応能力といってよいかもしれません）を育成する学問であること。こうした特性を考慮されたうえで、人文学部のあるべき姿を描いていただきたいと思います。

[新任教員紹介]

着任の挨拶にかえて

英米文化学科教授 池内 静司



イギリス文学と少し腰を据えて付き合うようになってから、およそ 30 年になります。経済学部出身である自分が、なぜこのような進路をとることになったのか、少々不思議な気がしないでもありません。もともと好奇心だけは旺盛だったようで、学部学科の選択肢のなかに文学部のいくつかの学科が含まれていたことを覚えています。結局は経済学部に進み、西洋経済史のゼミに所属することになりました。このゼミでたまたま内容報告を求められた論文のひとつが、産業革命前夜におけるイギリスの農村を扱った英語の論文であったことは、後にイギリス文学に関心を持つきっかけの一つであったかもしれません。

やがて、教員免許を得るため文学部で開講されていた教職関連科目を受講することになりましたが、その中のある授業では、W.B. イエイツ、T.S. エリオット、W.H. オーデンらの詩のアンソロジーをテキストとして使っていました。当時の私は、これらの詩人たちの作品を翻訳で少しばかりかじったことがあるだけで、それ程親しみを抱いていた訳でもなく、原文で読むことの難しさもあって、そのすばらしさを味わう程にはどの作品にも深く入り込むことはできませんでした。しかし、これらの詩人たちの詩とそれなりに格闘するなかで、それまで親しんでいた日本の詩人たちの世界とは、きわめて異質な世界がそこにあるという印象を強く抱いたのを覚えています。

す。とはいえこの段階では、それは少しばかり文学に関心のある若者が抱くその時々印象にとどまるもので、とりわけ英文学研究の道に自分を誘うほどのものではなかったように思います。

T.S. エリオットを中心に英文学を専攻しようとしたのは、就職した後、再度大学で勉強したいと思い立ったときのことでした。そのころ私が抱いていた関心は、文学を哲学や思想との関連で見えていくことにあったと思います。知的探求に邁進する人間と文学作品を生み出す作家が、一人の人間において共存する姿が、無性に魅力的に見えたことを覚えています。今から考えると、あまりにも荒っぽい関心の持ち方ではありましたが、文学部の大学院へ進学しようと決心したとき、エリオットは自分にとってギリシャ以来のヨーロッパの知の伝統の中にしっかりと足場を築き、哲学と文学を融合する巨大な存在としてきわめて魅力ある対象と映っておりました。ハーヴァード大学の哲学科での研究者としての経歴と、イギリス国教会へ帰属した後の信仰の生活とが、彼の文学を生み出す力の一部として共に作用したはずであり、この両者をエリオットはどのように調停し得たのか（あるいは、し得なかったのか）といったことも、やがて関心の対象になりました。また、エリオットの詩の世界にある不思議な叙情性がたまらない魅力ともなっていました。現在の

私の関心は、エリオットばかりでなく、もう少し視野を広くとって、イギリス文学に見られるいわゆる世俗化の兆候とその実態を、時代の知的状況の推移との関連で自分なりに探ってみたいということにあります。このような観点に興味を持つこと自体、エリオットを研究し始めた頃から自分があまり変わっていない、あるいは、進歩していないことの証拠であるような気がします。なんとか少しでも実りあるものにしたいと思っています。

24年前、北海学園大学教養部に着任し、その後、共通教育センター（研究部）、経済学部と異動し、この4月から人文学部に迎えて頂きました。それぞれの教授会で、いろいろな方々にお世話になったことが改めて思い起こされます。異動後も担当科目は従来の共通教育科目が中心で、学部の科目では「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」と「英米文学講読Ⅱ」の担当です。旧知の方も多い学部ですが、どうぞよろしくお願い致します。



[新任教員紹介]

越境と逸脱をめざして

英米文化学科教授 本城 誠二



4月より人文学部英米文化学科に所属することになった本城です。人文学部では新人ですが、北海学園大学には1980年（昭和55年）に教養部講師として赴任し、教養部が解体した後は、3年間共通教育・研究センターに、その後6年間経済学部にも所属しました。同じ大学内での幾つかの学部をいた事は、様々な大学に在籍したような、不思議なかつ相対的な認識をもたらすような経験でした。28歳で新米講師として採用されてから27年もたつて、定年までのあと13年の方が短くなってしまいました。

生まれも育ちも札幌で、北海学園大学の近くにある豊平小学校、八条中学校で少年時代を過ごしました。放課後に北海高校のグラウンドで野球やサッカーをした事を覚えてますし、今でも大学付近を歩くと、幼馴染の家やお店に出くわします。13年後に再び懐かしい町に赴任したのは奇遇でした。

札幌西高校を卒業後、一浪して北海道大学文類に入学。教養部を経て、文学部文学科英米文学専攻で学びました。学部では先輩や仲間と勉強会を開いたり、同人誌を作ったり、いっぱしの文学青年を気取っていました。卒業論文と修士論文のテーマは共にヴァージニア・ウルフと時間の問題です。しかし次第にもともと興味を持っていた音楽（ジャズ、R & B、ロック）や映画を研究対象とするようになり、時代もカルチャラル・スタディーズ

の台頭によって、ポピュラー・カルチャーのアカデミックな研究が認められるようになったのが好都合でした。趣味が仕事になってしまうというのは、幸せかなと思います。

と言う事で、現在の研究分野はと聞かれると、アメリカ文学・文化、詳しくは現代アメリカ小説、文学理論、大衆文化（音楽、映画、ミステリー）と答える事にしています。最近書いたものを振り返ってみても、6本のうち4本においてミステリーを扱っている事に自分でもあらためて気づきます。現在のテーマは、都市と郊外を文学・文化（映画）から考察する事、60年代以降のアメリカをポストモダン・アメリカという枠組みでとらえる事、またアメリカの絵画とアメリカ史・文化史を交差させてみようという試みもあたためています。

しかしこの1年半は、つい先日出版された『しみじみ読むアメリカ文学』（松柏社、2,000円）の翻訳に集中していました。これはアメリカ文学研究者6名が、それぞれ2編づつ戦後の短編小説を訳すという企画です。2編のうち1篇は比較的名作家の短編、1篇は有名でないが優れた作品という組み合わせです。いい短編でも長すぎたり、著作権が取れなかったり、現実的なトラブルもありました。しかし自分の訳したい2編を選び出す作業が戦後アメリカ小説の復習になり、翻訳における英語と日本語の関係も考え直すいい機会に

なりました。共通コンセプトの「しみじみ」については、まだまだしみじみはしたくないぞという気も一方ではありますが、文学離れの現状を憂えて、とっつきやすいけれど内容の濃い短編を選びすぐりました。機会があれば読んでみて下さい。

英米文化学科の学生との接点ですが、今年初めて経験した「基礎演習」では、ネットで様々な「基礎演習」の方法を検索して、「学びの方法を学ぶ」というテーマを設定しました。



21 名の新入生を連れて、図書館ツアー（説明役は日本文化出身の H 君）を初めて経験。迷路のような図書館は知の迷宮でもありました。またパソコンの初歩と一緒に学んだり、毎回何をするか悩みつつも、楽しんでいます。でも一方では！先生の言われたように高校のホームルーム的な役割もあるかなと思います。後期は美術館・書店・放送局といった人文や英米文化と接点のありそうな文化的な施設を学生に調査してもらうフィールドワークを予定しています。

最後になりましたが、人文学部の諸先生、事務の皆さん、学生諸君、新人のような気持ちで頑張りたいと思いますので、宜しくお願いします。

[新任教員紹介]

地球歩きのすすめ

日本文化学科教授 寺田 吉孝



ブルガリアのヴェリコ・タルノヴォにて

本学の協定校レスブリッジ大学で日本文化を教えるため、昨年9月からカナダ、アルバータ州に滞在した。帰国間近の12月のある日、ブラジルからメールが届いた。恐る恐る開けてみると、17年前のモスクワ留学時に、同じ寮で暮らしていたブラジル人からだった。二人とも住所を変えることが多かったため、ここ10年ほど連絡が取れなくなっていた。インターネットは便利なものだ。検索していると音信不通の相手に行き当たることがある。彼が私のアドレスを探し当てたのもこの方法だった。彼は祖国ブラジルの大学に職を得、言語学を教えているとのことである。彼を介して17年前親しくしていた別のブラジル人と連絡を取ることができるようになった。今回のお話は、「インターネットは便利だ」ではなく、「留学というのは素晴らしい」ということについてである。

1990年秋、36歳にして初めてロシア（当時はソ連邦）に留学できることになった。結婚1周年を記念して女房とソ連邦を2週間ほど旅行したことがあったが、それ以来10年ぶりの訪ソだった。留学期間の約5カ月は夢のようだった。当時、近畿、中部の大学や予備校等でロシア語や英語を週に20コマほど（約30時間）教え、さらに、自ら小さな大学受験予備校を経営していた。休みは3、4カ月に1回だった。そんな頃、全ての仕事を友人や家族に託して旅立った。

モスクワに到着。日本にいる時とは異なり、自由だった。約10年ぶりの大学での勉強。それ以外すべきことがなかった。本当に自由だった。しかし、ソ連邦崩壊直前のモスクワは大混乱だった。マーケットやデパートに商品が殆どなかった。目当ての物を買うのに、1～2時間、列に並ぶのは当たり前。それでもモスクワにはまだ商品がある方だった。モスクワ周辺の町から多くの人が買い出しに来た。そのため、モスクワ市居住証明書が発行された。この証明書を店のレジに提示しなければ商品が買えなくなった。朝早く街中に出て行くと、人が道端に倒れていることが度々あった。時には血を流して。ルーブルの価値低下は止まる所を知らなかった。食堂での1回の食事代が1ルーブル（約5円）。モスクワ市内交通（地下鉄、バス、トロリーバ



エカテリーナ宮殿（サンクト・ペテルブルグ近郊）

ス、路面電車）乗り放題の1カ月定期が12ルーブル（約60円）。金銭感覚がおかしくなる。

こんな刺激の多い時に、机に向ってばかりいるのは勿体ない。ということで、同じ寮にいる仲間達と遊び歩くようになった。ロシア人の大学教員（ソ連邦の頃は4、5年に1回、3、4カ月の有給の研修が許されていた）や大学院生、世界中から集まった教員や学生など多彩な顔ぶれだった。この時のコネクションが現在役に立っている。最近、頻繁に訪問しているロシア、ウクライナ、ブルガリアには数多くの友人がいるが、その源は17年前のこの留学時に知り合った面々である。少し遅い36歳での留学でも、多くの知り合いを得ることができた。精神的に柔軟な大学生くらいの若い世代であれば、もっと交流を深めていくことができる。国際交流は、国や町のレベルだけでなく、一人ひとりの個人的な付き合いからも輪が広がって行く。日本に来る外国人との付き合いも良いが、自ら海外へ出かけて異文化の中に浸かることができればなお良い。隔年だが、学生達をロシアへ引率している。自分の学生時代に夢叶わなかった留学を学生達に経験してもらいたいからだ。5週間程度の短い留学だが、日本とは文化も生活レベルもかけ離れたロシアでの体験は刺激的なようである。留学後、世界観がすっかり変わってしまう。海外への関心はもちろんのこ



円山公園にて（学生、OB、留学生、客員教授とともに）

と、自分の周りの身近なこと、日本のこと等に関して、問題意識を抱くようになる。

特に、日本文化学科の学生たちには留学をお勧めしたい。自分達の学んでいる学問が如何に重要か分かるだろう。勉強への意欲、使命感も湧き上がるだろう。私は喜んで留学のお手伝いをしたい。人文学部日本文化学科教員として、外国語科目担当教員として。

第4回 日本文化演習

日本文化を味わいつくす

今年も恒例の「日本文化演習」での関西方面への研修旅行を実施しました。日程は、平成 19 年 2 月 19 日から 24 日までの 5 泊 6 日。引率には、追塩千尋、野坂幸弘、須田一弘、大石和久、徳永良次があたりました。参加学生数は 43 名。内容は、講演会、団体研修（3 日）、自主研修（2 日）でおおむね天候にも恵まれ、内容の濃い研修になりました。

特に今回は、同志社女子大学の後藤明先生に、「海を渡ったモンゴロイド」と題して講演をしていただき、文化人類学への関心を深め、あるいは黄檗宗万福寺の門前で有名な普茶料理を堪能したりと、非常に幅広いものとなりました。

日程を写真を多く使った旅行記形式に纏めました。どうぞご覧ください。

（徳永良次 記す）



平城宮跡 朱雀門にて

2月19日(月)
1日目

新千歳空港



京都ホテル着
(ザ・パレスサイドホテル)



講演会



パーティ

2月20日(火)
2日目

〈団体研修〉
岩船寺



後藤明先生講演会

同志社女子大学の後藤明先生の話には興味と共に興奮も覚えた。古代の神話もその一つであるが、民族の移動の際使われていた先人たちの航海術だ。今は後継者がいないと聞く。その航海術の一端を聞いただけで素晴らしいものだということが感じられた。それは星の位置だけではなく、波の形、その海域に出現する動物たちまでも海の旅の指標とすることに奥の深さを感じたからである。

橋本拓也（卒業生）



後藤先生の講演会



パーティの一品

岩船寺・浄瑠璃寺

団体研修では多くの寺社を訪ねたが、私は間近で仏像を見たこともなかった。最初に訪れた岩船寺の阿弥陀如来座像から圧倒された。次の浄瑠璃寺では、阿弥陀如来と薬師如来、弥勒菩薩の見分け方や印相の意味について詳しい解説を聞くことが出来、あまり仏教というものに馴染みのなかった私としては大いに参考になった。

3年 大内知香



日本文化演習体験記

浄瑠璃寺



平城宮跡



秋篠寺

2月21日(水)
3日目

〈自主研修〉

2月22日(木)
4日目

〈団体研修〉 平等院鳳凰堂



岩船寺三重塔の天邪鬼



岩船寺にて 鐘突き体験



浄瑠璃寺



平城宮跡での散策 朱雀門が見える

平等院鳳凰堂

鳳凰堂の菩薩は生きている人間のような表情をしていました。今にも動き出しそうでした。音楽を心から楽しんでいるかのような表情でした。私も音楽をしています。音楽をしているときは、心から楽しいと思うときであり、幸せな時です。そして同じ音楽をしている仲間でも、その人にとっての音楽の楽しみ方、感じ方は人それぞれで個人によって違うものです。それを雲中供養菩薩二十六軀の一体一体の表情の違いが顕著に表しているように感じ、とても心が惹かれました。

3年 那須一恵

黄檗山萬福寺



醍醐寺



琵琶湖疎水記念館



南禅寺



平等院鳳凰堂



萬福寺の開版（木魚の原形）



これが普茶料理

普茶料理

私たちは「食」にとても恵まれた。「これはすごい」と思ったのは萬福寺近くで食べた普茶料理である。肉も魚も使わず、油も天ぷら以外には使わずこんなにもおいしい料理が作れるものなのかと驚いた。

3年 佐藤萌美



日本文化演習体験記

2月23日(金)

5日目

〈自主研修〉



南禅寺の三門

2月24日(土)

6日目

〈団体研修〉
北野天満宮



北野天満宮にて、牛に願いを

国立民族学博物館



万博公園・梅まつり 太陽の塔が見える

新千歳空港

おわりに

今回の旅行において、私は楽しむと言うよりかなり屈折した考え方で物事を見てしまった。そういった意味で、高校時代の修学旅行とは全く違った視点で、古都を歩いたように感じる。

言いがかりをつければ際限ないだろうが、本来の京都は古代日本から長い歴史を誇る場所であり、調べれば調べるほど奥深いはずである。ここから何を学んで、何を現代に生かすのか。もう一度パンフレット等をよく読み返し、分からないことは調べて、考えてみようと思った。

3年 宮地修子

ゼミ紹介

2部 日本文学科 大濱ゼミナール



宮下 亜里紗（4年）

我がゼミは三人。少数精鋭ともいえる程に、少人数のゼミです。加えて担当は、厳しいと噂される大濱先生です。完膚なきまでに叩きのめされるのかと怯えもしましたが、実際にそんな理不尽な筈も無く、先生はむしろ、面倒見が良く寛容でした。確かに厳しい一面も有りますが、その指摘は的確であり、突きつけられた新たな課題を克服した暁には、得られるものが多数有ります。

そんな大濱ゼミは、自分で「考える」事を重んじ、学ぶという事に常に貪欲で、とてもマイペースに進められるゼミです。また、機知に飛んでおりつつも時折皮肉が混じる先生の話も、拝聴の価値有り、です。自由度が高い故の苦労はありますが、必ずプラスになる「何か」が掴めます。

足立 一剛（4年）

先生の仰った言葉で、一番印象に残っているのは、「自分の好奇心を大切にしろ」ということだ。このゼミでは基本的に自分のやりたいことを、多少「歴史」という枠組みからずれたものであっても、卒業研究として学習できる。自主的に学ぼうとする態度がこのゼミでは大切となる。その態度とは、「渴望」だとか、「熱意」というものに似ている。「これを知らないと、自分はこれからの人生をやっていけない」。そんな漠然とした思いが、案外、「学習」という営みにおいては重要であり、また、大濱ゼミを通して、自分が知り得たことの一つである。

新家 麻衣子（4年）

二部での大濱ゼミは、先生を含めても4人しかいません。しかし、この少人数だからこそ毎週とても濃い時間を学べるという魅力があります。

ゼミでは主に歴史資料を読んで、それについて自分なりの考察と調べたことをレジュメにまとめて、それを使って先生や仲間に発表するという形ですが、資料を効率よく探すための方法を学ぶために学園の図書館へ行き書庫を見学したり、北海道に関する貴重な資料を保管している赤レンガの文書館へ行ったりなど、意外とアクティブな事もしています。また、資料を自ら集める方法として考現学という風変わった講義もゼミの中で行いました。

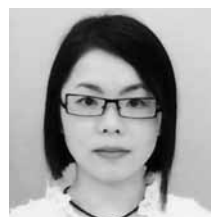
卒業論文を書くために必要な行程はゼミの授業と平行して伝授していただけるのも特徴だと思います。ですから、自分が一番やりたいこと、それが具体的に決まっていなくても「こんな事に興味がある」という気持ちがあって、それについての探求心に自信がある人はこの大濱ゼミにはぴったりだと思いますよ。先生の広い知識からの助言なども聞けますしね。（私はいつも助けられています）

興味が沸きましたら、是非大濱先生の授業を受けてみてください。ゼミでの雰囲気や片鱗でも感じることが出来ると思います。

大 学 院 の 窓

「負け犬を越えて」

文学研究科 英米文化専攻 修士課程 1年 前田 陽子



私は現在、文学研究科 英米文化専攻の修士課程に在学している。同時に札幌市内の総合病院の急性期病棟に勤務している看護師でもある。少し前の流行言で表現するならば、いわゆる「負け犬」で、「未婚、子なし、三十代以上の女性」にあてはまる。まんざら仕事が嫌いなわけでもなく、つつい頑張り、のめり込んでいるうちに、いつのまにか結婚や子育てといった役割から遠ざかっていたのである。ふと気が付くと、仕事に没頭する以外は、趣味や物欲に傾倒することが多くなり、形のあるものに心のよりどころを求めようとしていると感じはじめた。はたしてそれで心は満たされるのだろうかとか強く疑問を感じていた時に、本学の人文学部に入學し、もともと美術に強い興味を抱いていたため、卒業論文でレンブラントの肖像画をとりあげ、肖像画が誕生した背景や史料としての意義について考察した。1つの事柄と向き合い考察するという行為から、今までに得たことのない充足感を覚え、研究が自分の心の支えになることを見つげられたように思った。

修士課程では、単に一般的な歴史背景からレンブラントの作品を考察するのではなく、絵画の主題となる「旧・新約聖書」等についての知識や解釈、キリスト教図像学など非言語的な「表現」を解釈する方法論およびその歴史的な流れ、レンブラント自身の宗教性や聖書解釈の特徴などについて研究し、最終的には、レンブラントの作品やキリスト教に対する自らの関心の根源を探りたいと考えている。現在、社会学者ジンメルのレストラン論を検討しているが、レンブラントを通して宗教性の発露を見いだそ

うとする視点に関心を抱いた。また、20世紀に活躍したブルクハルト、ホイジンガなどの歴史家も、それぞれ全く違った視点からレンブラントを扱っていることを知り、一人の人物の芸術作品を検討することの難しさと面白さをあらためて感じている。

大学院での学びに満足しながら、現実には、臨時入院や手術で仕事が終わらず、急に遅刻や休みを申し出なければならなかったり、また、自分の自由な時間がなかなか取れず、研究が進まなかったりと困難続きでもある。最近、ある講義の中で、本居宣長の『うひ山ふみ』を読む機会に恵まれ、その中の「晩学の人も、つとめはげめば、思ひの外功をなすことあり。又暇なき人も、思ひの外、いとま多き人よりも、功をなすもの也。されば才のともしきや、学ぶ事の晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止ることなかれ。とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし。すべて思ひくづをるゝは、學問に大にきらふ事ぞかし」という箇所に感銘を受けた。學問をすすめるにあたっては、年齢や時間が問題なのではなく、あきらめや挫折が一番の負の要因であることを改めて感じ、自分なりのペースで前向きに、学び続けていきたいと考えている。今や女性の生き方は多種多様になり、勝ち負けだけの問題ではないことは広く認識されつつある。今後、わが職場で着実に増殖し、多数存在する「負け犬」たちに対しては、自分と向き合う中で壁につき当たった場合、「学び」という心の支えもあるのだということを、さりげなく助言していければ幸いと考えている。

■学会・研究発表

米坂スザンヌ “Investigating the Functions of Teacher L1 Use”、3月、国際英語教育教師学会 (TESOL) 第41回国際大会、シアトル (米国) ◇ “Adding an on-line component to a course in English Phonetics”、6月、全国語学教育学会 (JALT) CALL 学会、東京 Lorne Kirkwold “Peter Gzowski de Toronto chez Maclean's à Montréal / Toronto's Peter Gzowski on assignment for Maclean's in Montreal,” bilingual presentation at the conference for ACTJ (Association of Canadian Teachers in Japan) and the Canada Project in Kyushu at The International University of Kagoshima (May 2007).

常見 信代 「‘Leges Scotie’ 第22章「賠償規定」(Bern MS)をめぐって」、2月18日、「中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会」、熊本大学 ◇ 「中世スコットランドのネーション」、6月17日、日本西洋史学会第57回大会、中世史部会小シンポジウム報告、新潟大学

■著作・論文

本城 誠二 訳書:「夏の読書」、「二人の聖職者」、「しみじみ読むアメリカ文学」(平石貴樹編訳)、6月、松柏社

米坂スザンヌ “Supplementing an English Phonetics course with on-line independent study”、3月、北海学園大学『人文論集』第36号、189 - 201頁

大濱 徹也 「キリスト教会にみる死者供養」5月30日、『宗教で解く「現代」vol. 3 葬送のかたち—死者供養のあり方と先祖を考える—』、佼成出版社、63 - 69頁

宝利 尚一 「日本メディアの戦争報道(上)」3月、『人文論集』第36号、北海学園大学人文学会

桑原 俊一 「創世神話の系譜—古代メソポタミアの資料から(2)」3月、『人文論集』第

36号、北海学園大学人文学会

濱(浜) 忠雄 「ブラック・ディアスポラとハイチ・アート」6月、『学園論集』132号

徳永 良次 「和歌山・桃山町 興山寺所蔵の木食應其上人関係資料」3月、『人文論集』第36号、北海学園大学人文学会

寺田 吉孝 “Грамматические ошибки в русской речи японских студентов как результат взаимодействия двух языковых систем”、3月、『学園論集』131号

大石 和久 「映画の想像力の問題——映画とサルトルのイメージ論——」3月、『人文論集』第36号、北海学園大学人文学会

安酸 敏真 「トレルチと『歴史主義』の問題(承前)」2006年12月、『年報 新人文科学』第3号、北海学園大学大学院文学研究科 ◇ “Lessing as a Proponent of Modern Dialectical Theism” 3月、『人文論集』第36号、北海学園大学人文学会

土屋 博 「教典と儀礼」2006年12月、北海学園大学大学院文学研究科『年報 新人文科学』第3号 ◇ 「宗教研究における『当事者性』とスピリチュアリティ」3月、科学研究費補助金研究成果報告書(北海道大学大学院文学研究科)『カルト問題と社会秩序——公共性の構築に関わる比較社会論的検討——』

岩崎まさみ 「ダム建設と沙流川留意気宇の人々の生活」、『開発論集』第79号、北海学園大学開発研究所、61 - 78頁 ◇ 「サケをめぐる今と昔: カナダ北西海岸先住民のサケ漁」、『先住民による海洋資源の流通と管理』平成15年度~平成18年度科学研究費補助金、基盤研究(A)研究成果報告書(代表者: 岸上伸啓)93 - 112頁

常見 信代 「史料にあらわれた Judex」3月、『人文論集』第36号、北海学園大学人文学会

■講演

米坂スザンヌ 「英語と現代世界」平成 18 年 10 月、第 14 回市民公開講座「ことばを生かす、ことばが生きる」、北海学園大学人文学部、北海学園教育会館

大濱 徹也 「開拓殖民と宗教」2 月 6 日、第 11 回中堅神職研修(特課程)、北海道神社庁◇「歴史資料として重要な公文書等の保存等について」5 月 28 日、福岡県吉塚合同庁舎◇「アーカイブズ・図書館・博物館」6 月 12 日、専門図書館北海道地区協議会

■評論・エッセイなど

宝利 尚一 新聞比較論「朝日新聞の編集改革は本物か」、『月刊ウィング・サッポロ』、2006 年 7 月号◇「毎日・朝日名人戦番外勝負」同 8 月号◇「道新社長退陣の要求は内紛か」同 9 月号◇「イラク陸自報道の検証が必要だ」同 10 月号◇「メディアは政治を正しく伝えたか」同 11 月号◇「安倍政権を見定めるメディア」同 12 月号◇「NHK 命令放送はやりすぎだ」2007 年 1 月号◇「朝日・日経は生まれ変わるか」同 2 月号◇「外交・安保で差が出た新年社説」同 3 月号◇「不信広げるメディアの不祥事」同 4 月号◇「読売報道は『防衛秘密』なのか」同 5 月号◇「問われるテレビ界の自浄能力」同 6 月号

小野寺静子 「古典散策 家持歌の漢語」4 月、『藝林』

岩崎まさみ 「多民族先進国カナダから学ぶ」、『季刊北方圏』2007. Vol. 138 ◇「多民族社会日本へ向けた一步を」、『季刊北方圏』2007. Vol. 139

大濱 徹也 「日本脚本アーカイブズに期待すること」3 月 25 日、『日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書 [II] 一脚本・台本は記憶と記録の宝庫一』社団法人日本放送作家協会、日本脚本アーカイブズ特別委員会◇「安武秀岳さんの世界」3 月 31 日、『人文論集』

第 36 号、北海学園大学人文学会、11 - 12 頁◇「歴史を問い質す読書のすすめ一己が生活の場を確かめたい一」4 月 2 日◇北海学園大学附属図書館報『図書館だより』第 29 巻 1 号、北海学園大学附属図書館◇「まなびと一子どもを思う大人たちに贈る Web マガジン、日本文教出版、学びと歴史 大濱先生の読み解く歴史の世界」、vol. 1 「^{しょうぶすごろく}尚武須護陸」に読みとる歴史」(NO13 2007.4) / vol. 2 「肖像に読みとる明治維新」(NO13 2007.4) / vol. 3 「楠正成像に読みとる時代精神」(NO14 2007.5) / vol. 4 「世界をどのように見るか」(NO15 2007.5)

■研究費受領

濱(浜) 忠雄 科学研究費補助金(基盤研究 A) 研究分担者、「脱植民地化の双方向的歴史過程における『植民地責任』の研究」(代表者: 永原陽子東京外国語大学教授)、2007 - 2010 年

土屋 博 科学研究費補助金(基盤研究 B) 研究分担者(新規)『宗教の社会貢献活動に関わる比較文化・社会学的研究』(研究期間: 平成 19 年度~平成 21 年度)(研究代表者: 北海道大学大学院文学研究科教授・櫻井義秀)◇科学研究費補助金(萌芽研究) 研究分担者(新規)『日韓宗教文化の混在における葛藤とめぐみ』(研究期間: 平成 19 年度~平成 20 年度)(研究代表者: 北海道大学大学院文学研究科教授・櫻井義秀)

■その他

常見 信代 翻訳 アン・ウィリアムズ著・常見信代訳、「イングランド人の国王ハロルド 2 世の一族とその経歴」3 月、『人文論集』第 36 号、北海学園大学人文学会◇司会 日英合同シンポジウム、「中世ブリテンの歴史的位相—Part 2」、5 月 19 日、慶応義塾大学

〈日本文化学科〉

・指導教員 菅 泰雄

◎加 藤 久美子「日常会話における擬音語・擬態語の考察」

狩 野 真 衣「伝えたい内容を相手の印象に残す表現技法」

谷 本 雅 恵「若者語を考える」

中 島 勇 樹「北海道の地名―十勝地方の考察―」

新 田 桃 子「北海道方言のゆくえ―大学生におけるアンケート調査から―」

野 呂 奈菜子「女性名の変遷」

本 多 真奈美「小樽人アクセントの実態」

米 田 麻 希「性格設定と言葉遣いについて―『ドラえもん』を題材に役割語をみる―」

四 方 高 志「現代の落語家の名前における表記と音声から見られる特徴」

☆紺 野 智 美「フィンランド語と日本語との対照研究―離格「に／から」を中心に―」

武 田 秀 樹「外来語についての考察」

目 黒 早和子「コブクロの歌詞の魅力」

・指導教員 中川かず子

◎刈 田 亜 希「西洋人の対人行為について―ゴフマンの「相互行為儀礼論からの一考察」―」

佐々木 麻 衣「日本人の価値観―江戸時代と武士道―」

高 濱 光「韓国の若者の敬語から見る現在」

門 馬 めぐみ「ロシア人らしさとは何か―文化と言葉から考える―」

艾 澤 里 美「韓国新世代における日本の受容。大衆文化開放の背景と現在―韓国若者は日本をどう思っているのか―」

今 野 咲 恵「言葉に表れる文化性―敬語から日本人を考える―」

☆石 崎 彩「顔が広いと足が広い―日韓のことわざ・慣用句の比較―」

永 田 慎 一「調査結果から見るギャル文字の実態」

村 田 伊 世「イギリス カーディフ大学における「日本語教育実習サマー・コース」の研究報告」

・指導教員 徳永良次

◎相 原 由 希「接客用語に見る日本語の誤用と変化」

稲 葉 智 子「アイヌ語地名―「シノロ」の地名の由来を考察する」

競 あすみ「日本人の数の概念―年齢差を「いっこ・にこ」という現代の言葉遣い―」

小 池 香 織「擬音語・擬態語―今昔物語集から現代まで残っている話―」

田 中 玲 奈「セカチュー現象の作られ方―ベストセラーとその外的要因―」

花 崎 みより「現在の出版流通―書店の変化と進化―」

原 朋 子「札幌方言の特徴」

平 田 梓 子「ゲーム内における会話の量的性格―『MOTHER3』の語彙―」

福 井 康 人「ネットワークゲームにおける語彙の省略―FINAL FANTASY XI―」

保 芦 梓「比喩表現―小説の文章から見る比喩とは―」

村 上 裕 一「うたの言葉―梶原敬之の歌詞分析―」

山 本 真 弓「若者語について」

・指導教員 大石和久

◎池 下 実嘉子「『水戸黄門』研究」

市 村 奈 々「字幕についての考察」

蝦 名 紘 季「『24―TWENTY FOUR―』―魅力と背景に関する考察―」

大 関 友 果「『クドカン』研究」

岡 山 倫 久「日本アニメの巨人宮崎駿研究」

奥 原 尚 途「ウォルター・イライアス・ディズニー―成功に隠された偶然と必然―」

押 木 航「テレビゲームの映画性とテレビゲームの進歩の歴史」

小野寺 弥 生「『アリー my Love』を通して見た現代社会と女性」

庄 林 明日香「竹中直人の演技の魅力を探る」

高 橋 洋 樹「アメリカ映画音楽の使途と変遷」

野 田 祐 樹「映画を「観る」とはどういうことか」

星 野 智 弘「『ジョゼと虎と魚たち』小説と映画の比較」

枅 崎 夏 子「映画における音の意義と心的効果」

松 村 周一郎「日本人と「韓流」ドラマブーム」

山 内 愛「アートアニメーションの魅力に迫る」

山 崎 孝 宏「演劇と映像の文化における比較と考察」

五十嵐 圭 輔「飛躍する俳優たち」

工 藤 竜 輔「『教祖誕生』に見る新興宗教」

・指導教員 須田一弘

◎石 澤 睦 美「出版不況と活字離れ」

石 澤 悠 平「スポーツとドーピングの関係」

伊 藤 大 輔「日常に潜む呪術」

稲 垣 ちひろ「現代における着物の意味」

大 江 ひろみ「沖縄食文化に関する一考察」

大 塚 彩 乃「現代の日本の名前」

小野寺 亜 妃「女性と結婚」

加 藤 瞳「日本人と温泉」

桑 原 詩 乃「日本の漫画文化」

寺 田 雪 乃「日本の墓と家族について」

広 瀬 駿 哉「異類婚姻譚考」

ハツ橋 志 穂「現代のペット事情」

☆小 島 二三人「日本競馬における名馬の条件」

塩 越 大 介「ファッションの歴史」

畑 中 千 春「相撲と行司―その歴史と現在―」

竹 中 尚 史「神話とは」

福 島 淳 平「麻雀―中国から伝わり戦後麻雀ブームを経て―」

・指導教員 大瀧徹也

◎小野川 陽 平「資産としての小樽運河」

片 山 詩 織「酪農に生きる人々―富農富国を目指して―」

近 藤 峻「悲恋追想記」

今 野 俊一郎「釧路に魅了された人々―太平洋炭鉱の盛衰物語―」

辻 佑 太「妖怪考」

三 原 佐知子「大地の埋み火」

山 崎 健 司「電波が伝える時代の声―ラジオと国民衆の生活―」

吉田 幸 作「新渡戸稲造」
江刺家 紫「稲垣日誌に見る日露戦争」
奈良 知 之「北のプロレス創成期」
☆佐藤 祐 介「釧路へ移住した鳥取県士族」
外崎 里 美「豊平のはなしー豊平村と豊平川ー」
豊島 美智子「ヤマセ、ヒカタ、タマカゼのふく礼
文島」ーふるさとの漁業の歴史ー」
森 美知子「父と母が刻んだ時間」
和田 紀 子「道しるべ」
横畑 知永子「わたしという存在」

・指導教員 郡司 淳

◎石黒 佳 介「札幌市会研究」
江越 春「篠路歌舞伎ー「伝統芸能」の創生と
再生ー」
小野 萌 美「洋装の歴史」
工藤 由 唯「北海道の婚姻儀礼」
團 梨絵子「北海道のお菓子」
久末 志寿香「身だしなみとしての化粧」
藤原 幸 香「子供の遊びー近代と現代にみる文化
変容ー」
宮本 さつき「「台所」考ー北海道の食文化ー」
山本 理 皓「自転車と日本人」
和田 晋 朋「近代都市と公園ー中島公園を中心と
してー」
太田 晴 子「ローカル・ラジオー北海道にみる魅
力と将来ー」
工藤 宏 剛「「日本ジャズ」の誕生」
☆相原 圭 亮「明治二十年代における民衆のナショ
ナリズムー大津事件を中心にー」
池戸 夕 湖「ウサギ考」
工藤 信 明「ニューミュージックの誕生」
滝田 航「くつわもの」の世界ー『将門記』を中
心としてー」
福田 健 宏「夢幻廻廊ー本格ミステリに捧ぐー」

・指導教員 野坂幸弘

◎神尾 直 樹「江戸川乱歩・『パノラマ島綺譚』」
岸 由里子「遠藤周作『沈黙』ー西洋と日本の対
立ー」
雉子谷 麻 美「山田詠美ー「ベッドタイムアイズ」
北村 翔「芥川龍之介ー「歯車」について」
小林 亜紗子「福井晴敏『亡国のイージス』ー新世
代を切り開く「ニュータイプ」作家の
挑戦ー」
酒井 真理子「『斜陽』ー虹・霧・デカダンスー」
佐々木 舞 子「『舞姫』における登場人物の「悲哀」
について」
荘 司 和 也「『壊色』ー町田康の代表作」
田中 真 衣「「砂」が生み出す存在価値の表象ー安
部公房『砂の女』論ー」
谷川 郁 江「『屍鬼』に見る生と死の境」
滑川 真 由「村上春樹「午後の最後の芝生」につ
いて」
鳴海 弥 生「『斜陽』かず子の革命私生児をこの胸
に抱くことの意義」
橋田 知比呂「「どすこい。」をむっちょりと楽しむ書」
矢野 章 代「夏目漱石ーその生涯と『我輩は猫で
ある』についてー」

安藤 睦 希「太宰治論」
☆揚岩 祐 子「詩集『箱庭から』」
杉本 里 人「ヤマギシズム私論ーすべての人が幸
福な世界の実現を目指してー」
高橋 里 奈「創作「白日」概要」
谷川内 理 回「小川洋子論ー『葉指の標本』ー」
中野 朝 美「創作短編小説集」

・指導教員 小野寺静子

◎植松 美 沙「七夕歌にみえる万葉女性の恋」
佐藤 智恵美「坂上郎女ー歌に託す心ー」
辻 杏 美「万葉に見る紅」
中村 奈緒美「大伴家持が愛した花・なでしこー歌
にこめられた想いー」
道端 裕 子「紀女郎考」
☆坂元 久美子「『源氏物語』における光源氏と紫の上
の贈答歌の考察ー心情表現を中心にー」
山口 和「東歌に見られる生活と心情」

・指導教員 追塩千尋

◎内田 亜 希「怨霊の発生と藤原氏」
大野 聡 美「平安貴族の二世観」
佐藤 直 子「賀茂神社と祭」
千葉 綾 子「藤原氏と春日社」
津崎 絵 美「今昔物語集における国司の悪行」
野島 明 菜「平安期の女房と乳母」
三門明 ひとみ「史書の中にみる神武天皇像」
山口 伶 史「宇佐八幡神託事件ーその意図と主体
人物ー」

・指導教員 船岡 誠

◎井原 暢 彦「日本の霊性について」
行場 育 美「宗教から見る酒吞童子という物語」
工藤 希「平家物語と太平記に見る武士道」
佐久間 勇 希「五輪書から見る宮本武蔵の考え」
菅原 枝里子「江戸三座猿若町移転について」
二階堂 巧「古代における音楽の役割と楽器」
橋本 拓 也「鹿芥集の成立とその内容について」
福田 匠「入唐までの空海の謎について」
三浦 陽「上杉謙信の天下」
斉藤 綾「安楽庵策伝の残したもの」
☆佐々木 光 枝「押井守研究ーその実写志向についてー」
佐々木 乃 仁「天狗考」
佐崎 こそえ「平重盛一つくられた虚像ー」
高橋 八重子「定山溪温泉開祖・定山の生涯について」
寺井 敬 祐「日本の人神信仰」
三浦 友 江「鈴木正三における「三世観」」
三室 広 志「奥州藤原氏に関する研究史と権力形
成についての考察」
水口 修「日蓮が反浄土教の立場に至ったその
理由についての考察」

〈英米文化学科〉

・指導教員 井上真蔵

- 布 澤 亜梨沙「奈良美智ー世界がつり目のこどもに魅せられる理由ー」
村 本 麻衣子「北海道における台湾人観光客ー異文化接触の視点から考えるー」
廣 川 真 弓「イサム・ノグチーアメリカと日本の狭間で生きたアーティストー」
檜 舘 沙 知「小澤征爾ー西洋を魅了した日本のタクトー」
大 場 那由他「『ブラック・レイン』ー日米異文化接触の視点よりー」

・指導教員 岩崎まさみ

- 石 塚 智 美「台湾原住民族の歩みから見る権利回復運動」
井 関 健太郎「日本における道徳教育について」
大 竹 瑠衣子「サンゴ礁減少のワケー沖縄の海の現在と未来は……」
奥 山 絵里香「開発途上国に生きる子どもたち」
川 上 華 愛「同性結婚と日本の同性愛者の人たちの現状」
河 野 志麻子「日本におけるひきこもり現象についての考察」
佐々木 梢「異文化で育つ子どもたちー不慣れな環境への適応とそこで見つける自分の居場所ー」
清 水 良 江「ハワイ社会におけるフラの文化ー時を経て受け継がれるフラの意義とはー」
杉 山 奈 穂「笑いと人間の関係」
竹 内 良 太「人間の美意識ーなぜおしゃれをするのか」
竹 中 理 麗「結婚・家族について考えるー現在、過去、そして未来へー」
平 松 優「エコソリズムー環境保全と地域住民の活性化ー」
古 東 詩 織「カナダにおける多文化主義の理解」
佐 藤 友 美「韓流の源ー日韓交流文化と冬のソナタ」
田 中 理 恵「カナダにおける移民問題と日系カナダ人の歴史」
荒 木 佑 輔「サッカーとそこに蔓延る問題」
菊 地 可奈子「茶の歴史と現代」
篠 原 比奈子「人権問題とアイヌ民族の歴史」
高 野 悠 己「旅の魅力ー旅が人にもたらすもの、その魅力と価値ー」
寺 島 康 晴「プロ野球の課題」
山 谷 優 介「環境問題とエコライフ」

・指導教員 上野誠治

- 秋 田 実 那「オーギーイングリッシューアメリカ英語、イギリス英語との違いを探るー」
尾 坪 由実子「発話行為における含意の自然な文脈に対する必要性」
難 波 加奈子「言語を考えるーガラ語を通じてー」

・指導教員 大塚秀之

- 荒 川 未 帆「ファストフードがもたらす健康被害」
池 上 高 吾「米国社会における喫煙という文化」
上 井 朋 実「同性パートナー」
鈴 木 強「エンロン、ワールドコム事件が提起する問題点と改革の動向」
関 竜 也「ベースボールと人種」
中 田 麻百合「国際結婚から入る重国籍問題」
西 尾 理 沙「ウォルマートと地域社会」

- 平 間 しのぶ「アメリカが抱える貧困問題ー常時 3000 万人以上の貧困者を抱える世界で最も豊かな国ー」
松 村 こず恵「ハワイ移民のアイデンティティー変わりゆく文化と意識」
松 岡 朱 里「イラクへ向かう若者たちー見えない徴兵制の実態ー」
高 橋 育 子「アメリカ合衆国移民法の歴史とその影響」
乾 馨 与「ハワイの日系人ー移民たちのハワイー」
岡 平「壁を破ろうとした人々ーベースボールと黒人差別ー」
小 林 まゆ子「アメリカにおける尊厳死問題」

・指導教員 川上武志

- 石 田 明 子「Emily Dickinson 死、そして永遠へ……」
大 下 優「Walt Whitman 研究ーホイットマンの女性観ー」
小山内 陽 子「John Keats とオード」
北 野 沙 織「『緑樹の陰で』ー古いものと新しいものの融合ー」
小 上 同「William Wordsworth — *Ode: Intimations of Immortality* に見る本来的自己の行方ー」
佐々木 泉「カズオ・イシグロの文章構成ー〈品格〉と〈ジョーク〉の対立ー」
中 村 枝見子「ウォルト・ホイットマンー草の葉からのメッセージー」
古 館 真 澄「エミリー・ディキンソンー苦悩の天才ー」
細 川 由 美「ジョージ・エリオットサイラス・マーナー」
山 口 華 絵「トリリアン・グレイの肖像」に於けるオスカー・ワイルドのヘレニズム主義について」
村 上 淳 一「Edgar Allan Poeー美女再生譚『美女たちのいない世界』ー」
高 橋 あ い「J. R. R. Tolkien *Mr. Bliss* の翻訳に携わって」

・指導教員 栗原豪彦

- 酒 井 拓「会話とジャズ」
澤 田 奈緒子「日常の中にある本音とたてまえ」
志 村 はるか「笑いにおけるレトリックの分析」
水 野 顕 識「初対面におけるポライトネス」
竹 田 衣 里「英語の女ことば」

・指導教員 桑原俊一

- 小 野 陽 子「中世のユダヤ人迫害ー教会の権力と民衆の行動力ー」
紺 野 裕 子「結婚の文化ーキリスト教とユダヤ教をめぐってー」
佐 藤 千 恵「人々を惹きつけるクリスマスの魅力とは何か」
澤 田 昌井子「TARTANータータンとキルトの文化ー」
中 村 美沙子「テロとイスラームー欧米諸国との対立をめぐってー」
浜 本 三 樹「下着の歴史ーヨーロッパにおける下着とモラルの変化ー」
村 井 恵 美「二重国籍」
三 本 サヤカ「ユダヤの世界ー各業界にすがたを現すユダヤ人ー」

・指導教員 竹内 潔

- 小 島 智 子「不妊治療について」
鈴 木 絢 子「AIDS 問題を考える」
高 木 美 奈「人遺伝子情報と生命操作」

高 幡 亜希子「腎臓移植を考える」
 千 田 健 太「電磁波による人体への影響」
 中 江 美 保「遺伝子組み換え食品について」
 干 場 麻 貴「新型インフルエンザについての考察」
 松 木 麻 衣「日本人と生活習慣病」
 向 平 愛「日本のエイズについて」
 吉 村 直 人「地球温暖化問題とは何か～現状と対策を考える～」

・指導教員 土屋 博

石 井 美奈子「ニコライがもたらしたロシア正教一日本ハリストス正教会」
 桑 田 沙 織「レオナルド・ダ・ヴィンチー万能の天才」
 里 城 崇 文「現代人にとっての旧約聖書」
 千 田 一 貴「宗教と社会の関わり」
 松 下 まどか「錬金術と C.G. ユング」
 三 浦 あすみ「明治の女性アイコン画家・山下りん」
 八 木 美 澄「道徳教育と宗教」
 鈴 木 淳 子「カクレキリシタンの信仰～オラショについて～」

・指導教員 常見信代

垣 脇 聡 江「『ジャコバイトのヒロイン』、フローラ・マクドナルド」
 片 岡 麻 理「バーバラ・ジョンソンのアルバムに見る 18 世紀イギリスのファッション」
 北 井 さおり「カントリー・ハウスと風景庭園」
 白 岩 千 枝「ベスト大流行ー黒死病と大ベストを中心にー」
 瀬 川 かおり「漱石と日英同盟から見る日英関係」
 角 田 静 香「サミュエル・ピープスの日記ーベスト流行ーロンドン大火を中心にー」
 永 田 祐 介「スコッチウイスキーー生産過程と歴史ー」
 長 濱 勇「海洋国家としてのイギリスー19 世紀の国際環境とロイヤル・ネイヴィー」
 山 口 仁 礼「18・19 世紀の英国に存在した社交ー音楽ー」
 山 田 郁 美「大西洋を渡ってアメリカへーアニー・ムーアとアイルランド人女性移民ー」
 松 下 愛 枝「カナダ多文化主義の発展」
 池 端 明 理「風景式庭園ー『可能性のブラウン』を中心に」
 伊 藤 恭 子「大英博物館」
 浜 野 富美子「イザベラ・バードの旅の生涯と北海道の足跡」
 佐 藤 浩 大「イギリスの賭博」

・指導教員 濱 忠雄

大 井 芳 恵「EU の動向と諸問題ーEU が拡大するにつれてー」
 長 内 智 裕「スポーツというモノの変化と近代スポーツ」
 三 部 みゆき「コーヒーの世界ーその歴史と文化ー」
 村 太 舞「フランスの歴史をつくった女性たち」
 森 岡 和 也「時空を越えて衣の大切さを知るーアイヌと北方諸民族の衣服についてー」
 山 形 麻 実「フランス革命ーフランス革命の勃発要因と経過ー」
 山 本 育「ローマ文化ーローマ建築の特徴と、それに付随するローマ文化の背景ー」
 吉 岡 真由子「ヒトラーとユダヤ人ーホロコーストの引き金ー」
 吉 田 瑛莉佳「海賊ー海で生きた人々ー」
 吉 田 恵理子「ヨーロッパの魔女狩り・魔女裁判ー魔

女狩りの成立と発展ー」
 渡 邊 のぞみ「日本とヨーロッパの関係ー出会いからお互いの印象までー」
 乾 貴 宏「ポリネシア移民ーハワイ文化の崩壊ー」
 高 橋 美 樹「王妃マリーーアントワネット」
 民 野 知 夫「アメリカにおける黒人差別ー南北戦争から公民権運動までー」
 徳 橋 知 子「ジャンヌ・ダルクと魔女裁判」
 島 田 麻 美「コルセットの歴史ーその誕生から衰退までー」

・指導教員 宝利尚一

大 井 郁 美「トルコの EU 加盟問題について」
 大 塚 多喜子「ドイツ映画をより楽しむ方法」
 大 橋 いつか「世界に「NO！」をーセックス・ピストルズの衝撃ー」
 榎 福 香 里「日本人フリージャーナリストの活躍ー大手メディアの救済者たちー」
 工 藤 あずさ「ヨーロッパ・サッカーの抱える問題」
 近 藤 真 由「フランス移民 2 世の苦悩ー「2005 年暴動」の背景ー」
 近 岡 潤「NGO「国境なき医師団」の力」
 細 川 奈緒美「スイスの「中立」と「民間防衛」」
 吉 田 亜 紀「揺れる EU 拡大」
 吉 野 華 奈「公共放送の在り方を探るー日本のテレビ・メディアと BBC を例にー」
 東海林 由 希「イギリスにおける人種差別問題ー紅茶の国が映す「影」ー」
 野 口 信太郎「ドイツの人口危機と移民問題」
 福 岡 真 維「永世中立国・スイスの秘密ー国をまとめ、守るために必要なことー」
 増 山 理 絵「ヨーロッパの孤島、スイスーその特徴と EU 未加盟の理由ー」

・指導教員 安酸敏真

柴 田 卓「フロイトと未来ートマス・マンがフロイトの思想からみた人類の未来図ー」
 東 頭 亜 衣「P.O. クリステラーによるイタリア・ルネサンスにおける人間の哲学」
 時 田 亨「ダーウィニズムにおける誤りー批判的人々が指摘する問題点ー」
 三 井 紗知子「Protestantism and Progressープロテスタンティズムと進歩ー」
 矢 木 美奈子「クリストファー・ドーションの教育論と現代の教育危機ー西洋教育に学ぶ精神教育の重要性ー」
 柳 原 彬 広「Rollo May が見た心理学の中における実存主義運動の起源と意義」
 吉 田 和 真「18 世紀の観念がフランス革命に及ぼした影響」

・指導教員 安武秀岳

原 口 拓 夫「ジョン・ブラウン」
 藤 井 良 美「19 世紀前半米国における市場革命と第 2 次信仰復興運動」
 別 所 孝 俊「ビッグスリー寡占の崩壊のような過程でビッグスリーは市場の独占を失ったのか？」

・指導教員 米坂スザンヌ

中 島 弘 二「The Introduction of English Education in Public Elementary Schools」
 竹 村 優「The Language of Soccer」
 島 村 紘 子「Education System in Finland」

編 集 後 記

編集委員の初仕事として、新たにお越しの三名の先生方にエッセイのお願いをいたしました。先生方は他学部所属でしたので、既にお顔はご存じの方も多いと思います。しかし、エッセイの中には、普段語られない情報がギッシリです。読み終えて、いかがでしたか。きっと、「グッ」と身近に感じられることと思います。

(井上真蔵)

今号の日本文化演習報告では、演習の様子を生き生きと伝えるため、写真を多く使用してみました。いかがでしたでしょうか。

(大石和久)

人文フォーラム27：2007年8月2日発行 編集人：井上 真蔵、大石 和久 発行人：追塩 千尋
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161) 印刷：(株)アイワード



キナホー圖
其形圖のことし大サ尺餘。夷。是を得る時は腹をきりて其膏腸をとるのみ木幣を製して其腹中に入咒言して又水中放つ傳へ云。如此すれハ蘇生して又來ると其澄には時とき腹中に木幣ある物を獲ると云。

表紙：秦 憶 丸（村上島之允）「キナホー圖」、『蝦夷島奇觀』1800年7月自序、墨筆画、折本、28.5×20.5cm 北
 鯨文庫所蔵

『蝦夷島奇觀』は、1798（寛政10）年～1806（文化3）年まで幕史・普請役として蝦夷地の地理・風俗・産物などを調査した村上島之丞（1760〔宝暦10〕年～1808〔文化5〕年）がアイヌ民族の習俗を忠実に描き、解説とともに後世に伝える有名な民族資料である。

「キナホー圖」は、「マンボウ」を描いたもの。「マンボウ」はマンボウ科の海産の硬骨魚。体は側扁し、卵円形。体の後端に背びれと臀びれが張り出していて、腹びれはない。皮膚は鞣革状で背部は暗灰色、腹部は銀白色。単独で生活し、群を作らない。ゆっくり泳ぎ、移動は鈍重である。全長3 m、体重1 t以上になる。一度に多くの卵を産む。

一般に「キナボ」と呼ぶが、日高から東の地方では「ヘパルプ」と呼んでいる。語源は分らない。七月末から九月はじめ天気の良いときは海面に浮きあがって、昼寝をしているので、そこを鉈で打つ。大物なので難しい仕事である。「マンボウ」を一尾獲ると昔の二斗樽一杯になるほど油がとれた。肉や腸は煮て刻んで乾燥。脂肪が少ないので早くできあがる。これを冬の食糧として保存し、油をつけて食べた。

最上徳内著『蝦夷國風俗人情之沙汰 上』（1791〔寛政3〕年）、「産部の事」には、以下のようにある。「「キナボウ」形鮫鯨の如し、蝦夷人此魚の腸より油腸を取り、腹中へ幣を入れて海へはなす也。」

（北鯨文庫 吉田千萬 記）